

ZOCALO 2016 6 ▶ 7

ZOCALO = ソカロはメキシコの都市の広場を意味するスペイン語。埼玉県立近代美術館はアートを通して交流する市民の広場をめざしています。

台座が彫刻を演じるとき

企画展「竹岡雄二 台座から空間へ」

2016年7月9日(土)～9月4日(日) 遠山記念館と同時開催

男性用便器をそのまま作品にしたマルセル・デュシャンの《泉》(1917年)を、ご存じでしょうか。《泉》は当時、展覧会への出品を拒否されましたが、考え方や見せ方によっては既成品(レディメイド)でも芸術になりうることを示した革新的な作例として、その後、美術史の中で頻りに取り上げられてきました。《泉》を語る際、手仕事によらない、レディメイドの手法に言及される場合が多いのですが、別の見方から作品の意義を捉えることも可能です。すなわち、台座の上に便器が置かれているという点です。デュシャンの《泉》は、台座に物を置けば、否応なしに作品として見えてしまうという、彫刻を成立させる前提条件を見事に照らし出しているといえるのです。

デュシャンの作例から浮かび上がる台座の問題に目を向け、制作を試みてきたのが竹岡雄二さん(1946年-)です。竹岡さんは日本で彫刻を学んだ後、1970年代半ばからドイツで活動を始め、台座を主題にした制作に着手します。作品を主役とするならば台座は脇役ですが、一般的に彫刻を陳列する際は台座がないと飾れません。つまり、彫刻を展示する(見せる)ことにおいては、台座はその行為を根底から支える存在となっているわけです。この点も竹岡さんの制作を理解する上で重要です。

美術家が作品を発表するまでには、「作る」ことだけでなく、「見せる」ことも関わってきます。通常は表現や創造にあたる「作る」ことが主要なものとなされます

が、副次的ともいえる「見せる」という観点に敢えて比重を置けば、美術はどう捉えられるのでしょうか。竹岡さんが台座に注目するのは、この「見せる」仕組みから美術作品の成り立ちを問い直すという論点に深く関わっています。また、台座にしる、彫刻にしる、それが置かれた場所は、視線の注がれる空間として立ち上がってきます。作品を「見せる」仕組みについて問うことは、必然的に空間自体の「見方/見せ方」の問題にも通じていきます。展覧会のタイトル「台座から空間へ」は、このようなテーマの広がりを持っているのです。

ところで、竹岡さんは台座の現物をそのまま展示するわけではありません。《オレンジの台座》や《七つの台座》のように、素材、色彩、形状、配置などを吟味し、見る者の視線を誘い込む彫刻的な様相をまとったものとして提示します。本来は台座の上に載るべき作品を不在にさせるだけでなく、台座を彫刻(のようなもの)に転換させているのです。作者自身も重視するこの転換(ディスポジション)によって、これらの台座の作品は、特異な事物として私たちの眼前に現れます。すなわち、台座が彫刻を演じたもののようにも見え、台座でも彫刻でもない何か別のものにも見えてきます。両義的でアイロニカルでありつつ、空間や見る者の知覚へと作用するこれらの事物たちは、デュシャンの便器を支えた台座の問題を、新たな方向へと進展させているのです。



竹岡雄二《七つの台座》2011年
Photograph by Achim Kukulies, Düsseldorf



竹岡雄二《インターナショナル・アート・マガジン・ラック》1997年 個人蔵
Photograph by Achim Kukulies, Düsseldorf

この展覧会では、台座を巡る制作から出発し、「見せる」仕組みを問うために、ガラスケースや棚といったモチーフも作品にしてきた竹岡さんの30年以上にわたるドイツでの活動を振り返ります。さらに、当館だけではなく、埼玉県川島町の遠山記念館でも展覧会を同時開催します。伝統的な建築として知られる遠山邸(1936年竣工)の座敷、土間、庭園など、和風建築ならではの場を用いて作品を展示します。白い壁の展示室とは異なる、「生きる空間」といえる和風建築に対し、作者がどのように向き合うかという点も、大きな見どころになるでしょう。(I.H.)



和風建築が美しい遠山記念館(川島町)の遠山邸外観

さくねんのたまもの

平成27年度新収蔵作品のご紹介

厳しい経済状況を背景になかなか美術作品の購入ができずにいた当館ですが、平成27年度は、小村雪岱の肉筆画の取得以来、実に6年ぶりに美術作品の購入が叶うという大変うれしいニュースがありました。

購入したのは、県美術家協会会長、芸術院会員の塗師祥一郎氏の代表作《山村》(2005年)です。山あいの斜面に連なる家並みを、塗師氏が得意とする雪景色として描き出した傑作です。創刊70周年の埼玉新聞社と共催で1階展示室で開催された「塗師祥一郎展」に新収蔵作品として出品され、昨春のリニューアルオープンに彩りを添えることができました。さらに喜ばしいことに、県内に本社を置くセントラルグループの田中徳兵衛氏からは、「塗師祥一郎展」に出品された「未来に遺したい埼玉の風景」のシリーズ全20点をご寄贈いただきました。本県を代表する洋画家の優れた作品のコレクションによって、県立美術館としての格がまた一段上がったように感じられます。

塗師氏の洋画以外では、現代美術作品の充実が特筆されます。平成26年度芸術選奨文部科学大臣賞を受賞した県内在住の美術家・佐藤時啓氏からは、アジア圏の自転車タクシーを彷彿とさせる《リキジャカメラ》(1999年)のご寄贈を受けました。1階エレベーター前でご覧になっている方も多くこと

しょう。また、昨年度もご寄贈を受けた橋本真之氏の鍛金作品や立石大河亞(タイガー立石)の資料がさらに1点ずつ寄贈されたほか、平成22年度に企画展を開催した県内の重要作家、吉野辰海氏と清水晃氏の作品も新たに収蔵されました。とりわけ清水氏ご自身からの寄贈は、企画展の開催をご縁とするものであり、展覧会への取り組みがさらに別の成果を生むという好循環の一例であるといえます。そのほか、アメリカで活躍した画家・古川吉重の作品もご遺族から4点のご寄贈を受けることができました。作家は存命中、当館館長であった故・田中幸人が評価していた画家であり、時を経てかつてのご縁が実を結んだかたちとなっています。秩父出身の画家・斎藤政一のご遺族からも、松尾鉦山を描いた第5回日展特選作《雪の鉦山》(1973年)のご寄贈を賜りました。

日本画としては、日本美術院同人の大野逸男氏より第81回院展奨励賞の佳作《川への道》(1996年)をご寄贈いただいています。また県内の篤志家の方から、県ゆかりの作家として重点的な収集対象である森田恒友の日本画時代の作品2点のご寄贈を受けました。2点のうち1点は、平成3年度の企画展「森田恒友とその時代」で借用・展示した作品であり、これもまた美術館の活動が県民の皆さまからしっかりと評価されている証だといえるでしょう。

平成25年度、26年度の休館中にご寄贈を受けながら公開できていない作品もまだまだあり、近年のたくさんの良質な作品寄贈に、美術館職員はうれしい悲鳴をあげています。順次MOMASコレクションで新収蔵品を紹介して参りますので、ぜひご期待ください。(T.S.)



1



2



3



4



5

1. 塗師祥一郎《山村》2005年
2. 佐藤時啓《リキジャカメラ》1999年
3. 古川吉重《L8-4》1990年
4. 清水晃《漆黒から》1990年
5. 大野逸男《川への道》1996年

第66回埼玉県美術展覧会(県展)を5月31日(火)から6月22日(水)まで開催中です。県展会期中は、MOMASコレクション観覧料が半額になります。